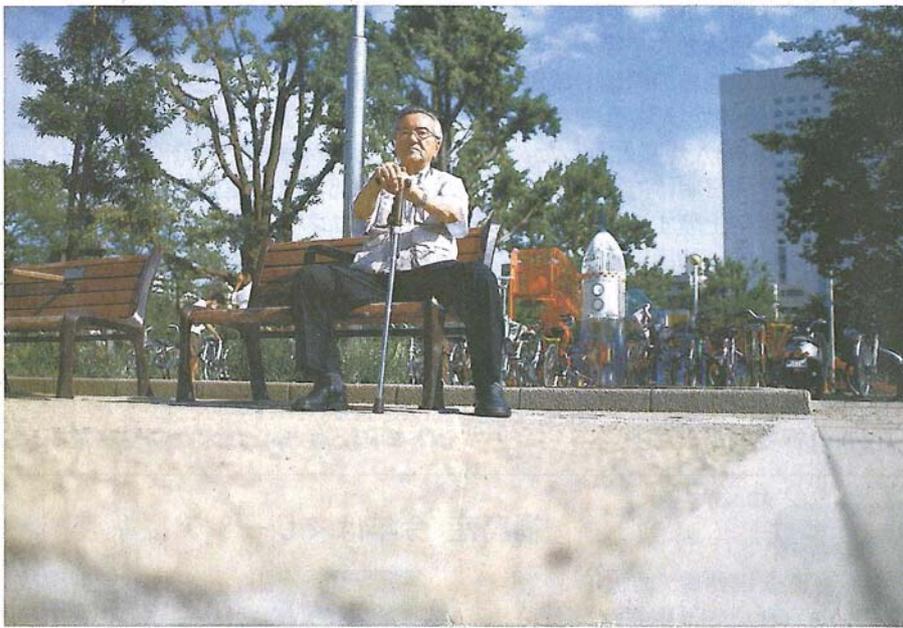




# 公園は埋葬地だった

## —10万人が犠牲 東京大空襲

「夏の太陽がカッカと燃えている」。作家、高見順



忘れられない……。星野弘さんは言った。68年前の悲劇を思い起こさせる碑などはないが、記憶に焼き付いている。東京都墨田区の錦糸公園で、小出洋平撮影

が敗戦の日に、そう記したような強い日差しがまぶしかった。錦糸公園（東京都墨田区）は東京・下町、墨東と呼ばれるところにある。1928（昭和3）年の開園。東京ドームよりもはるかに広い。

子供たちが駆け回っていた。歓声が響き、母親たちが笑顔で見つめている。ベンチで談笑中のカップル。昼寝するサラリーマン風の男性。平和そのものの風景。星野弘さん（82）は東京都墨田区は四方を見渡しながら、68年前のあの日のことを思い出していた。

「ああ」と言いながら、一本の大木を指さした。「見覚えがありますね。大きな穴が掘られてしまってる。そこに埋めたんですよ」

苦しい表情だった。当時14歳の星野さんはまさしく、ここにいた。同級生と一緒に、黒こげになった遺

体を引きずっていた。「あの臭いは……。忘れられませんか」

この公園にはかつて、1万2000体以上の遺体が埋葬されていた。だが、悲劇をしのぶすがは見当たらない。北の方にはスカイツリーが間近に見えた。

太平洋戦争中、米軍は都市を中心に無差別爆撃を繰り返した。45年3月10日、人口密集地帯が徹底して焼き払われた東京大空襲では、およそ10万人が殺りくされた。膨大な数の遺体はその後どうなったのか、ほとんど知られていない。

2度目のオリンピック開催地に選ばれた東京——。新しく華やかな歴史が紡がれる。一方で、忘れ去られようとしている戦争の痕跡がある。その歴史をさかのぼってゆきたい。

4面につづく

# 大空襲 覆われた真相

ストーリー

## 仮埋葬地から7万人 身元不明で火葬

今回の取材は

栗原俊雄(東京学芸部) 1996年入社、横浜支局、編集総センターを経て2003年から学芸部。論壇と歴史を担当。12年8月12日本欄で「硫黄島の遺骨収容」を執筆。著書に「20世紀遺跡 帝国の記憶を歩く」(角川学芸出版)など。写真は写真部の小出洋平が担当した。



写真家、広瀬美穂さん(左)を取材する栗原記者



東京大空襲犠牲者を悼む碑には千羽鶴が手向けられていた。見やればセミの抜け殻があった—東京都台東区の隅田公園で

# 「人目にふれぬ所へ」

### 1面からつづく

東京スカイツリーの足元を流れる北十間川、京成橋近く。観光に訪れた人たちが、ひっきりなしに行き交う。この辺りですね。遺体がたくさん浮いていました。星野弘さん(82)は東京都墨田区に水産見つけながら言った。星野弘さん一家は奇跡的に無事だったが家は焼けた。1945年3月10日未明、米軍の爆撃機は隅田川両岸の下町一帯を爆撃した。約300機の編隊だった。一晩で現在の江東区、墨田区、台東区を中心に26万戸の家屋が焼け、100万人以上が被災した。死者は10万人に及んだ。原爆を除く、通常の空襲としては史上最大規模の犠牲者が出た。東京大空襲と呼ばれる。本格的な空襲が始まる前、東京都は軍部と協議するなかで、空襲による都内の死者を2万人程度と見積もっていた。1日ではなく戦争の全期間を通しての死者である。被害想定は甘かった。

東京都の火葬場の処理能力は、1日5000体でしかなかった。10万もの遺体を一体一体系して火葬して埋めることは、およそ不可能だった。一方で、行政としては「いつ迄も路上においておくことは当時の都民の士気にも関係する」とであった。早急に人目にふれぬ処え運んでいくことが必要であった(「東京大空襲」)

「針金を通した。それに遺体を乗せてカラコン(カラコン)と引き上げた。京成橋から2分近く離れた錦糸公園には直後、深さも3メートルの穴がたざんて、その縁まで運び、トタンを傾けて遺体を滑らせた。作業は2カ月ほど続いた。たえようがない。今でもはきり覚えています」



大空襲の被害を受けたのは、隅田川沿いの下町(現墨田区)に集中していた。3月下旬ごろ、同級生らおよそ60人とともに、焼け跡の整理に動員された。路上や防空壕には、数え切れないほどの遺体の遺体があった。焼け跡でトタンを拾い、太

い針金を通した。それに遺体を乗せてカラコン(カラコン)と引き上げた。京成橋から2分近く離れた錦糸公園には直後、深さも3メートルの穴がたざんて、その縁まで運び、トタンを傾けて遺体を滑らせた。作業は2カ月ほど続いた。たえようがない。今でもはきり覚えています」

大竹正春さん(82)は東京都杉並区に、下町の城東(現江東区)で両親と祖母、姉の5人を暮らしていた。空襲で自分と母親は命をとりとめた。だが姉の遺体は11日、祖母の遺体は12日に家の近くの水路で見つかった。「引き上げてくれた人に頼んで、2人の遺体を脇によけてもらいました。トタンをかぶせて」。このあと、どこに運ぶか、親戚と相談しなければ。そう考えていた。ところが13日、現場に行くところの遺



①空襲で東京は焼け野原になった。日本政府は戦後、無差別爆撃を指揮した米司令官カーチス・ルメイに一等旭日大綬章を贈った。②隅田川にかかる言問(ことと)橋の親柱には焼け焦げたあとが残っていた

体はなかった。「どこかに埋められたんでは。2人が着ていた服には、名前が縫い込まれていたのに」。大竹さんは伏し目がちにそう話した。「死者の名前が分かっている。遺族が健在なことも。その遺体を、何の断りもなく処理してしまう……」。大竹さんは顔を上げ、しっかりと口調で言った。「仮にしろ、埋葬といえは聞かざるは埋められたんです」

2人がどこに埋葬されたのか分らない。父親も、ついに見つからなかった。仮埋葬地は、全体で何カ所あったのか。『東京大空襲』には「約150カ所」とある。しかし「戦災誌」に場所が明記されているのは80カ所程度だ。公園や寺が多い。場所の分からない約70の仮埋葬地について、東京都に照会しても、把握していないかった。

大竹さんは「土地の所有者が明らかにされるのを嫌がったか、行政側がおもひかかって公表しなかったのでしょうか」と悲しげに。財団法人東京都慰霊協会が85年に発行した冊子「戦災死者改葬事業始末記」(「始末記」)では、71カ所の仮埋葬地と仮埋葬された遺体数が記されている。一部を挙げると、上野公園(台東区)83866体▽隅田公園(台東区)1万2749体▽東陽公園(台東区)1万2749体▽錦糸公園(墨田区)670体▽中本公園(墨田区)3850体▽隅田公園(本所側)同3802体▽緑町公園(同)320体▽錦糸公園(同)1万2895体▽十思公園(中央区)504体などだ。このほか、病院の構内や学校の敷地にも埋められた。敗戦から3年余りが過ぎた48年冬、東京都は仮埋葬の改葬を始めた。多くの市民が利用する公園に遺体を土葬したままでは具合が悪かった。民有地の寺も同様で、苦情が多かったという。

「始末記」によれば、50年度までの3年間で改葬した遺体は8万2484体に達した。大きな穴に複数の遺体を埋めた合葬がほとんどで、身元特定するのは難しかった。掘り起こされた遺体で氏名が分かったのは、1割にも満たない7156体。8万余のうち7万5000柱の遺骨が安置されているという。始末記によれば、改葬にたずさわった都の職員らには、改葬には実名(以下同じ)、「(合葬した遺体は)、丁度沢庵漬とおなじですから、一番下の方などは湯気が出ています」

B氏「何とも言えない異臭のため気持ちが悪くなって倒れそうになる。そのとき、お線香を立てると、その臭いが消える。私は初めて線香の効力の大きなことを感じたものだ」

記録上、最も早く改葬が行われたのは、166体が仮埋葬された本龍寺(台東区今戸)で、48年の12月に始まった。住職の本多弘さん(85)によると、境内から遺体を掘り出す作業は、1カ月ほど続いた。「あれだけたくさん遺体が腐った臭いは、言葉にできませんね。2000体以上が仮埋葬された宝蓮寺(江東区亀戸)では、49年に改葬が行われた。同寺の鈴木典子さん(84)は振り返る。「黒白の幕を張って、中が見えないようにしていました。10人くらいの人、1カ月近く掘っていました。当時の住職は『見ない方がいい』と怖かった」

仮埋葬された遺体はすべて掘り起こされ、改葬されたのだろうか。場所が判然としない「70カ所」のどこか、今も眠っているのではないか……。

私は昭和史をテーマに取材をしている。仮埋葬地を知ったのは5年前の2008年8月、写真家の広瀬美穂さん(86)川崎市で大阪で開いた個展「Requiem(レクイエム) 東京大空襲」を見たときだった。仮埋葬地の現在を撮影した写真展だった。公園が多

かった。日常と隣接し、市民が安らぐ場所だ。そこに遺体が投げ込まれていた事実は、「銃後」など存在しない戦争の実態を雄弁に物語っていた。広瀬さんは05年3月、仮埋葬地のことを偶然知ったという。関係者の話を聞いていたうちに、体験者の高齢化が進み、仮埋葬地だけでなく、東京大空襲の記憶自体が風化していると感じた。「今、調査と撮影を進めなければ、被災者がいなくなり、痛恨の経験が継承されなくなってしまうという危機感。一人でも多くの人に知ってほしい」という(88)を紹介してくれた。

「安養院に遺体がたくさん並べられたことは知っています。地元の人が多かったから、引き取られたいんですよ。お寺に埋められた？ それ知りませんでした。女性は驚いた表情だった。仮埋葬地として挙げられている寺院のなかには、そのご自体把握していないところもあった。休日になるとにぎわう遊園地も、仮埋葬地として名を連ねられた。何も東京に限ったことではない。4000人以上の犠牲者が出た大阪大空襲(45年3月13、14日)、10000人を超える死者が出た福岡大空襲(45年6月19、20日)など、全国で200以上の都市や町村が空襲を受けた。原爆が投下された広島、長崎を含めるとおよそ50万人が亡くなったとされる。「およそ」と書かなくてはならないのも、その被害の実相が明らかになっていないからだ。東京大空襲の被害者は07年、国に補償を求めて東京地裁に提訴した。原告は132人になった。1、2審とも敗訴。今年5月、最高裁に門前払いされ敗訴が確定した。87年には、名古屋空襲の被害者が国に補償を求めた訴訟でも、最高裁で敗訴が確定した。また、大阪大空襲の被害者23人も08年に提訴したが1審で敗訴し、最高裁に上告している。

大きな壁となっているのは司法による「戦争被害受容論」。『戦争では国民みんなが被害にあった。だからみんなが我慢すべきだ』という「法理」だ。しかし国は戦後、旧軍人や遺族らに対し恩給など50万円以上を支給してきた。そうした援護を受けなかった民間人が「法の下の平等に反する」と感じるのは自然だろう。東京大空襲の被害者原告団はいま、立法による補償を求め活動している。被害者たちの戦争は、終わっていないのだ。

仮埋葬地だった場所、そうであったことを示す碑などはほとんどない。その一つ古刹に取材を申し込んだ際、「今さら、そんなことを蒸し返す必要がある

んだとかと断られた。悲惨ゆえに記憶を拒否しているように見受けられた。しかし、なかつたことには、いとも簡単に民間人が犠牲になってしまふ戦争の実相は見えてこない」

「せめて公園など行政が管理する施設には、仮埋葬地であったことを記す掲示板を置いてほしい」

家族がどこに埋葬されたのか分からない大竹さんは、そう話した。空襲の犠牲者を悼む碑が、隅田公園にある。台東区が86年に建てたものだ。碑文には「ここに刻まれた。あ、東京大空襲 明よすらかに 遺族の悲鳴が聞こえた気がした。政府は今年5月7日、東京大空襲について、「人道主義に合致しない」という答弁書を閣議決定した。しかし、「当時の国際法に違反して行われたとは言い切れない」とも指摘した。では、無差別爆撃は合法的だったのか。そして、誰に責任があったのだろうか。犠牲者は戦後68年を経てもいまだやすらかに眠れないだろう。国家と戦争の本質を考えるべきのために、仮埋葬の史実を記憶しなければならぬと思う。

# 70カ所 伝わらぬ記憶

